

トラークル研究

第八号

2011年10月

トラークル協会

〒270-0122 千葉県流山市大畔 237-3 三枝紘一方
Tel 04-7150-5782 Eメール saegusakouichi@yahoo.co.jp

トラークルの詩における das lyrische Ich の発展的変容

三 枝 紘 一

トラークルは、自らの詩について、また一般に詩についてのみならず、ポエティークについてもほとんど言及していない。僅かに二度、それもいずれも数行、これに関して述べているに過ぎない。その一つは、1911年の晩秋の頃に出されたものとされる詩人の親友ブッシュベック(Buschbeck)宛の書簡に述べられているものである。

Anbei das umgearbeitete Gedicht. Es ist umso viel besser als das ursprüngliche als es nun unpersönlich ist, und zum Bersten voll von Bewegung und Gesichten.

Ich bin überzeugt, daß es Dir in dieser universellen Form und Art mehr sagen und bedeuten wird, denn in der begrenzt persönlichen des ersten Entwurfes. (HKA I. S.485f.)

これは『Klagelied (嘆きの歌)』の改作された詩に付された文であるが、元の稿体が散逸してしまっただめに、どの点が改作されたのかは検証できない。したがって具体的に、どの点が「・・・いまや非個人的 (unpersönlich) であるだけにそれだけ元のより良くなっている」のか、また「・・・この普遍的な (universell) 形式と様式の方が最初の草稿の限定的に個人的な (persönlich) それよりも多くのことを言い、意味するであろう・・・」かは容易には分からない。

しかし個人的な、これは私的な (privat)、と言い換えることもできるが、これよりも非個人的な、普遍的な形式と様式の方を良しとしていたことは分かる。つまり詩から私的なものを排除することが志向されているとみなしてよいであろう。この私的な事柄の排除は、現代詩のメルクマールの一つである。

persönlich の前に begrenzt という副詞が置かれている。これは persönlich であるとしても内容が限定的になることを意味している。しかし抒情詩は本来個人の感情や思いの直接的な表出をこととするが故に persönlich にならざるをえない。これを如何に persönlich ならざるもの、すなわちこの書簡に示された unpersönlich な性格なもの、また universell な性格なものにするかをトラークルは、これ以降首尾一貫として志向していくことになる。このことによって独自の詩世界が発展、展開されていく。

この小論においては、その指標である das lyrische Ich の発展的変容を中心にして、その志向を追っていく。das lyrische Ich の概念は Margarete Susmann が初めて、その『Das Wesen der modernen deutschen Lyrik』において示した。これによると「das lyrische Ich とは、詩人がその所与の Ich から創造する Ich の客観的形式である」¹⁾。つまり生の Ich ではなく、これが創造した Ich ということである。また Jürgen Peper は、その『Transzendente Struktur und lyrisches Ich』において「Das lyrische Ich とは詩に持ち込まれたメンタルなジンテーゼの統一体である」²⁾としている。そして Hans Esselborn はその著『Georg Trakl』において、「das lyrische Ich は様式上個人的な表現においては Sprecher として、主体的な経験においては Erlebender として理解されねばならない、」³⁾と言う。しかし実際には両者が一つの詩においてほとんど同一である場合、同時に別々に示される場合と表現の上で各々一方だけが示される場合が想定される。

ここでは先ず現象的にその指標たる ich(これに加えて mir, mich, mein, wir, uns, unser が含められうる)を見ていきたい。これに 18 世紀以降の詩に見られるようになった ich selbst を指す du(これに加えて dir, dich, dein が含められうる)の詩における使用も考慮の内に加えるべきであろう。この例としては、

Ein Rot, das traumhaft dich erschüttert —

Durch deine Hände scheint die Sonne.

Du fühlst dein Herz verrückt vor Wonne

Sich still zu einer Tat bereiten.

「Kleines Konzert」 (HKAI. S.42)

Du träumst : die Schwester kämmt ihr blondes Haar,

「Der Spaziergang」 (HKAI. S. 44)

が挙げられる。

ich が頻出するのは、初期の詩、例えば『Sammlung 1909 (1909年集)』である。これはトラークルに限らず他の詩人においても初期の詩には多く見られる傾向である。これは若年時には自らを表出しようとする衝動や欲求が働くことに起因する。

具体的に言うと『Sammlung 1909』全36篇の詩の中で ich(mir, mich, mein を含めて)の登場する詩は、20篇に上る。その他 wir(uns, unser を含めて)が登場する詩は7篇(ただし、その内4篇には ich も登場)ある。したがって極めてその頻度は高い。その上同一の詩においても、それらは複数示され、頻出する詩も多い。その代表的例としては次の詩がある。

Das tiefe Lied

Aus tiefer Nacht ward ich bereit.

Meine Seele staunt in Unsterblichkeit,

Meine Seele lauscht über Raum und Zeit

Der Melodie der Ewigkeit!

Nicht Tag und Lust, nicht Nacht und Leid

Ist Melodie der Ewigkeit,

Und seit ich erlauscht die Ewigkeit,

Fühl nimmermehr ich Lust und Leid!

(HKA I. S.228)

この詩には ich が三度 mein が二度登場している。ちなみにこの場合 mein は Seele に係っているが、『Sammlung 1909』では、この係り方が大部を占める。しかし中・後期になると die Seele となり、mein のような所有冠詞をとらなくなる。これはやはり意識的な操作とすることができる。

Des weißen Magiers Märchen lauscht die Seele gerne. 「Abendmuse」 (HKA I. S.28)

Da die Seele kühlere Blüten träumt.

「Anif」 (HKA I. S.114)

次に「Drei Träume」を挙げる。その I では、

Mich däucht, ich träumte von Blätterfall,

Von weiten Wäldern und dunklen Seen,

Von trauriger Worte Wiederhall —

Doch konnt' ich ihren Sinn nicht verstehn.

「HKA I. S.215」

「私は何々を夢見たと私には思われる」と、ich の二重構造になっている詩もある。その III では、

Ich sah viel Städte als Flammenraub

Und Greuel auf Greuel häufen die Zeiten,

Und sah viel Völker verwesen zu Staub,

Und alles in Vergessenheit gleiten.

Ich sah die Götter stürzen zur Nacht,

と ich は Seher (見者) 的な姿を示す。

しかし ich 等一人称が直接登場しない詩においても、そのパースペクティブ、したがって隠れた das lyrische Ich(das lyrische implizite Ich)の所在が窺える詩もある。例えば、「Musik im Mirabell」には次のような詩行がある。

Das Laub fällt rot vom alten Baum

Und kreist herein durchs offene Fenster.

(HKAI. S.18)

この点に関しては、Käte Hamburger がその『Die Logik der Dichtung』において⁴⁾、また Weichselbaum もその『Georg Trakls Weg in die literarische Moderne』において指摘しているところであるが⁵⁾、kreist ... herein の herein によって、観察者である ich が公園を見渡せる建物の窓から見ていることが分かる。この隠された ich は、直接登場しないがゆえに観察者であると同時に Sprecher であると考えることができる。

また wir の現れる例として「Blutschuld」を取り上げる。よく知られ、論じられているように、この詩のタイトルは直訳すると「血の罪」になり、Blutschande(=Inzest)、つまり近親相姦を連想させる。内容もまたそれを裏書きする。詩人が妹グレーテと近親相姦関係にあったか、否かは、この詩やドキュメントにおける様々な傍証からその可能性が大であるが、その確証が出ない限り、特に研究者の立場としては、それがあったという前提で論じてはならないだろう。

しかしいずれにせよ、妹との間に近親相姦「的な」関係があったし、ヴァイクセルバウムが述べているように、近親相姦なるものが実際あったという可能性はほとんどなく、それは「文学に置き換えられた強迫観念 (Obsession)」⁶⁾ であるにしても、少なくともその妄想があったのは否めないであろう。それが妄想であったとしても、罪の意識にかられるのは言をまたないのである。

そうした関係を詩において示そうとする衝動と隠そうとする意志が闘ぎあってこのような暗示的なタイトルを掲げたのであろう。もう一つ看過できない理由として詩人は詩作を一つの贖罪と考えていたことである。それは詩人が出征するときインスブルック駅でフィッカーに手渡した紙片に記されていたアフォリズムめいた一文「dein Gedicht [ist] eine unvollkommene Sühne」(HKAI. S.463)が一つの根拠を示している。したがって詩に罪を示すことによって罪を贖おうとしたとも言える。この「Blutschuld」においては、聖母マリアに許しを請おうとしていることがこのことを裏書きしている。しかし抒情詩は本来読者に、その Sprecher がその Erlebender と同一視される危険が常につきまとう。そのためそれが微妙な (heikel) 事柄に関わる場合は特にそれを回避しようとする試みがなされる。そのもう一つの例として、これもよく引用される例であるが、「Passion」の詩行を取り上げる。その初稿では、

Zwei Wölfe im finsternen Wald

Mischten wir unser Blut in steinerner Umarmung

(HKA I. S.393)

となっていたが、第三稿では、

Unter finsternen Tannen

Mischten zwei Wölfe ihr Blut

(HKA I. S.125)

と変えられている。前者も暗示的な表現であるが、後者では wir が unser と共に消去されている。これも以上のような事情が反映していることは確かであろう。このことが事実でなくても wir は、もちろん現実の詩人と妹と取られ、また妄想としてもそれが事実とみなされる可能性は十分あるからである。

こうした詩人の特別な事情が ich を詩から次第に排除していくのに与っていたと言える。もちろん ich の排除は、Rimbaud の現代詩の有名なマニフェストと言うべき Je suis un autre. に集約的に象徴される、それに主に基づくものであることは言を俟たない。そして以降の詩に変容した様々な das lyrische Ich が見られるようになる。

初期の詩に頻出していた ich がほとんど現れなくなり、それにとって代わって、次の段階においては das lyrische Subjekt として man が登場する。例えば、

Über den schwarzen Winkel hasten

Am Mittag die Raben mit hartem Schrei.

Ihr Schatten streift an der Hirschkuh vorbei

Und manchmal sieht man sie mürrisch rasten.

O wie sie die braune Stille stören,

In der ein Acker sich verzückt,

Wie ein Weib, das schwere Ahnung berückt,

Und manchmal kann man keifen hören

「Die Raben」(HKA I. S.11)

この man は重みはないが ich の言い換えとすることができる。他の表現主義詩人の作品にもが見られるが、ほとんど文字通り「不定の人々」の意で使われている。

Die aschengraue Stirn wird schweißbetaubt.

Der Mund verzerrt sich furchtbar im Gesicht.

Man harret des Schreis. Doch hört man keinen Laut. Georg Heym : 「Robespierre」⁷⁾

このハイムの詩の man はパリの一般大衆である。しかしトラークルの man の使用は、当時の詩に最も影響の大きかった Rimbaud の詩 (Ammer の訳) の影響によるものと考えられる。ちなみに冒頭で引用したブッシュベック宛の書簡の zum Bersten voll Bewegung und Gesichtern の部分はヴィジョンの氾濫と言えるランボーの詩を念頭に置いて述べたように見える。例えばランボーの詩「Das Neujahrs Geschenk der Waisen」には次のような例が見られる。

Das Zimmer ist voll Schatten. Man hört im Düstern
zwei Kinder traurig und leise flüstern.

.....
man tanzen sah einen klingenden Reihn,
unterm Vorhang verschwinden und wieder erscheinen.
Am Morgen wachte man freudig auf,⁸⁾

しかしこの詩のように man は動詞 sieht や hört の主語である場合が多い。ランボーよりトラークルの場合それが顕著である。そして ich に代わってしばしば使用された man はこの一時期が過ぎるとほとんど登場しなくなる。このことはやはり man の使用は意識的であることを裏書きしている。ただ man は言ってみれば贅言である。つまりそれらを示さなくても、視覚対象や聴覚対象を提示するだけで man sieht, man hört であることが読者には理解出来る。事実その後の詩には視覚及び聴覚対象をそのまま示している例が多い。視覚、聴覚対象をそのまま名詞の形で示す方法として中期から頻出する。

Sonne, herbstlich dünn und zag,

.....

Sterbeklänge von Metall ; 「In den Nachmittag geflüstert」 (HKA I. S.54)

これは同時に詩から散文的要素を排除する詩の純粹化の一環でもある。

次に das lyrische Ich の感覺的器官が知覚する表現が見られる。これは比較的早くから出現する。

Das Ohr hört nachts Sonatenklänge. 「Musik im Mirabell」 (HKA I. S.18)

その後もしばしば現れる。

・・・ Die heiße Stirn verglüht in Ruh und Schweigen. 「Abendmuse」 (HKA I. S.28)

Auf das Gesicht tropft Tau.

「Zu Abend mein Herz」(HKA I. S.32)

Stirn や Gesicht は純粹な感覺器官とは言えないが、觸覺機能を持つ。後者は酒に酔って、たそがれる森を千鳥足で歩いている das lyrische implizite Ich の顔に露が滴る。

後期になると dieses(dies)Haupt が三回 (いずれも 1914 年に成立) 現れる。Haupt も純粹な感覺器官ではないが知覺すると同時に精神を司る身体的部位である。

Magnetische Kühle

Umschwebt dies stolze Haupt,

「Das Gewitter」(HKA I. S:158)

In verfallnem Zimmer kühl,

Scheint nur Lachen, golden Spiel,

Daß ein Sturm dies Haupt zerschläge

「Anblick」(HKA I. S:415)

Klage II

Schlaf und Tod, die düstern Adler

Umrauschen nachklang dieses Haupt :

Des Menschen goldnes Bildnis

Verschlänge die eisige Woge

Der Ewigkeit. An schaurigen Riffen

Zerschellt der purpurne Leib

Und es klagt die dunkle Stimme

Über dem Meer.

Schwester stürmischer Schwermut

Sieh ein ängstlicher Kahn versinkt

Unter Sternen,

Dem schweigenden Antlitz der Nacht.

(HKA I.

S.166)

dies stolze Haupt も dies(es) Haupt も das lyrische Ich の Haupt であることを暗示している。普通なら、

・ ・ ・ und eine schwärzliche Wolke umhüllte mein Haupt, ・ ・ ・

「Offenbarung und Untergang」(HKA I. S.169)

のように *mein Haupt* とされるところであるが、*dieses Haupt* とすると逆に強くここに意味が込められたように感じとれる。なおこの *dieses Haupt* は一首の換喩 (Metonymie) 的表現 (その特徴的な一部で全体を示す) と取ることが出来る。

「Klage II」においては、*dieses Haupt* の他に人間に関わる形象としては、*Des Menschen goldnes Bildnis* と *der purpurne Leib* がある。前者は人間の理想像を、後者は生命力に充ちた肉体を示す。他に *ein ängstlicher Kahn* があり、これは *dieses Haupt* と並んで *das lyrische Ich* に関係する。この *Kahn* はその象徴として機能している。これには戦場にあった詩人の存在の在りようが反映していると言える。このように形象が *das lyrische Ich* を暗示している例も見受けられる。

このような *das lyrische Ich* からの身体的部位の独立は、表現主義の詩のメルクマールのモチーフの一つである *Ich-Zerfall* とは関わりがないであろう。これはトラークルの場合は、*ich* の表出の回避と同時に形象性の重視と詩の純粹化への志向に由来すると考えられる。

他にトラークルの詩世界における特異な、形象である形容詞 (現在分詞) の中性名詞化されたものがある。中性名詞ながらその多くは人物を示す、そしてその大部分は *das lyrische Ich* を暗示しているように見える。その明確な例も一つある。

・ ・ ・ Am Saum des Waldes will ich ein Schweigendes gehn, ・ ・ ・

「Offenbarung und Untergang」 (HKA I. S:169)

更に *das lyrische Subjekt* として、*der Einsame*、*der Heimatlose*、*der Fremdling*、*der Wanderer* 等の特有な人物像が登場する。これらは詩的主体の言い換えである場合が多い。*der Einsame* の例、

Und schimmernd fiel ein Tropfen Blutes in des Einsamen Wein ; und da ich davon
trank, schmeckte er bitterer als Mohn ; ・ ・ ・

「Offenbarung und Untergang」 (HKA I. S.169)

der Heimatlose の例、

So sprachlos folgt

Der Heimatlose

「Abendland」 (HKA I. S.140)

der Fremdling の例、

Also rührt ein spärliches Grün das Knie des Fremdlings,

Wanderer はすでに『Sammlung 1 9 0 9』に登場している。

Wir sind die Wanerer ohne Ziele,

「Gesang zur Nacht」(HKA I. S.223)

したがって das lyrische Ich が Wanderer である意識が早くからあったことを示している。

Zu Abend mein Herz

Am Abend hört man den Schrei der Fledermäuse.

Zwei Rappen springen auf der Wiese.

Der rote Ahorn rauscht.

Dem Wanderer erscheint die kleine Schenke am Weg.

Herrlich schmecken junger Wein und Nüsse.

Herrlich : betrunken zu taumeln in dämmernden Wald.

Durch schwarzes Geäst tönen schmerzliche Glocken.

Auf das Gesicht tropft Tau.

(HKA I. S.32)

この詩においては一行目の man と四行目の dem Wanderer は同一視出来、したがって das lyrische Subjekt である。五行目と六行目の herrlich 及び schmerzlich は、その感情表出であり、また最終行の Gesicht は、その顔である。このように das lyrische Ich が様々な主体に書き換えられていくのもトラークルの詩の特徴をなしている。

しかし Wanderer がすべて das erlebende Ich と同一視することは出来ない。その指標となるのは次の詩行である。

Wanderer tritt still herein ;

「Ein Winterabend」(HKA I. S.102)

この Wanderer は外から家に入るなのであるが、tritt ... herein とあるから、明示されていないがこれを観察している主体の存在があるわけである。したがってこの Wanderer 即 das lyrische Ich と言うことはできない。しかしその分身とは必ずしも言えないが、Ich の親近的存在あるいはその可能態と見ることは出来る。

また Wild (獣) が中期以降登場する。最初は文字通り獣そのものであったが、次第に人格化され、ein sanftes Wild や ein blaues Wild になると人間を暗示するようになる。次のような例は、それが das lyrische Ich であると明示されている。

Als wohnt' ich ein sanftes Wild

「So leise läuten . . .」(HKA I. S.321)

— 9 —

更にトラークルの詩には Elis や Helian 等数々の伝説的・神話的・聖書的人物像が登場するが、これらに自らの想いを投影、仮託して造形されている。その適切な例としては、その出現は新しいがすでに伝説的な存在となっていたカスパール・ハウザーが注目に値する。歴史的なカスパール、実際にはヤーコプ・ヴァッサーマン(Jakob Wassermann)の小説『Caspar Hauser』⁹⁾に依拠しているが、この詩において造形されたカスパール・ハウザーのあり様に詩人固有な思いが反映している。1912年4月ブッシュベックに宛てた書簡の中で詩人は Ich werde endlich doch immer ein armer Kaspar Hauser bleiben. (私は結局はやはりいつも哀れなカスパール・ハウザーのような者であり続けることでしょう。)と結んでいる。この全文を挙げると、

Ich hätte mir nie gedacht daß ich diese für sich schon schwere Zeit in der brutalsten und gemeinsten Stadt würde verleben müssen, die auf dieser beladenen u. verfluchten Welt existiert. Und wenn ich dazudenke, daß mich ein fremder Wille vielleicht ein Jahrzehnt hier leiden lassen wird, kann ich in einen Tränenkrampf trostlosester Hoffnungslosigkeit verfallen.

Wozu die Plage. Ich werde endlich doch immer ein armer Kaspar Hauser bleiben.

(HKA I. S.487)

詩「Kaspar Hauser Lied」には次のような詩行がある。

Stille fand sein Schritt die Stadt am Abend ;

Die dunkle Klage seines Munds :

Ich will ein Reiter werden.

(HKA I. S.95)

一行目の奇妙な表現は、カスパールは自らの意志によって町に出てきたのではないことを示す。また二行目と三行目は一見相矛盾する事柄を示している。なぜ自らの欲求の表明が暗い嘆きとされるのか。これは書簡中の ein fremder Wille と関係づけられる。ヴァッサーマンの小説ではカスパールは実は Ich will ein Reiter werden の意味を理解してはいず、これは言葉を覚えさせるために言わされていたものであった。Ich will はカスパールの意志ではなく彼を養い育てた者の意志なのである。したがって彼が心ならずも発するこの声が暗い嘆きとなるのは、都会＝文明社会では心ならずも Ich will として活動しなければならないからである。Ich will は実は ein fremder Wille なのである。

この詩に関しては、ヴァッサーマンの『Caspar Hauser』のカスパール・ハウザー像と異

なる点にトラール自身の思い、あるいはメッセージが読み取れる。例えば自然と宥和しているカスパールのあり様は、ヴァサーマンのそれにも見られるが、一步踏み込んで自然の喜びを自らの喜びとしている点 (die Freude des Grüns)、またこのような人間を真の人間とする見方 (O Mensch)、更にはこういう人間は文明社会にあっては亡びざるをえないという運命的認識の悲嘆は詩人特有のものである。

このように詩人はカスパールに仮託して自らの思いを述べているわけであるが、むしろ逆説的になるが、これによって所与の ich を示さずに直接的に自らの思いを制約されず表明されうると言える。

その他に詩的主体が表面には現れない表現も後期には見られる。

Wieder wandelnd im alten Park,

O! Stille gelb und roter Blumen.

「Im Park」(HKA I. S.101)

この文には定動詞が欠けており現在分詞 wandelnd が動作を示しているが、詩的主体は明示せずに済む。しかし wandelnd の主体は das lyrische Ich であることは分かる。

Erinnerung, begrabene Hoffnung

Bewahrt dies braune Gebälk

Darüber Georginen hangen,

Immer stillere Heimkehr,

「Herbstliche Heimkehr」(HKA I. S.349)

Erinnerung が誰の「思い出」なのか、また begrabene Hoffnung が誰の「葬られた希望」なのか明示されていないが、やはり das lyrische Ich のそれであることが暗示されていることが分かる。これら最後の二例は、もちろん ich の表出を回避しようとする志向による表現であるが、同時に、これによって詩が文字通り凝縮され、純化されることになる。

まとめに換えて

抒情詩の宿命と言える Sprecher が同時に Erlebender であることは, begrenzt persönlich にならざるをえない。いかに抒情詩の固有な特性である個人的な発声をとどめながら、詩を unpersönlich, universell にするか、いかにこの二律背反性を克服していくか、これがトラールの詩法の大きな問題の一つであった。ランボー(Rimbaud)の je suis un autre. に端を発する現代詩の das lyrische Subjekt としての Ich の回避という広汎な傾向に沿って次第に明らかに Ich が消去され、更に詩の普遍化への腐心がなされるわけであるが、それにはトラールの個人的な特殊な事情も絡んでいた。それは詩人の最愛の女性、妹グレーテとの

関わりから生じた感情や想念をいかに非個人的なものにするかという考慮も一つの契機となったと言われている。トラークルの詩の場合、その中、後期において das lyrische Subjekt が形式上ほとんど言わば三人称化されることになるが、しかしそれらが客体化され、詩が叙事詩化されるわけではない。むしろ逆にそれらによって内面世界の多様な敷衍化がなされるのである。

das lyrische Ich は中期から後期に至るにしたがって次第に発展的に変容させられる。それは先ず man から始まり、Ich-selbst を暗示する du、身体的部位（特に感覚、感情、知覚、精神を司る部位）、あるいは「Klage II」における Kahn のような象徴的形象、また中性名詞化された形容詞（現在分詞）、更には blaues Wild、そして Wanderer のような人物像、またカスパー・ハウザーのような伝說的、神話的、聖書的人物像に至るまで多岐に亘っている。同時に das lyrische Ich を表に出さず、そのパースペクティブのみを示す表現、その行動を現在分詞で示すことによって主語の表示を免れる表現、その想念、感情のみを示してその主体を示さない表現等も、—これは詩の凝縮化、純化の側面を持つが— やはり一種の das lyrische Ich の変容と言って差し支えないであろう。

身体的部位の独立は、形象性の重視の所産である面が多いが、人物像の場合、それらの形姿は詩人と等身大ではないにして das lyrische Ich を様々にメタモルフォーゼさせることによって自由な活動の場を与えられて、Ich の内面世界の多面的な発展的展開が可能になったと言える。詩人はそれら数々の形姿を借りることによって、限られて(begrenzt)個人的な(persönlich)な境位から解き放たれ、詩は普遍的(universell)なものとなり、時としてそれらの形姿の持つ特殊性によって制約を受けながらも暗示的に自らの感情、メッセージを自らの可能態と言える各々の形姿に体现せしめ、冒頭に挙げた書簡の言葉のように、より多くのことを言い、そして意味する(mehr sagen und bedeuten)ことが出来たと言えるであろう。このことは、ドイツの詩の歴史においても画期的なことである。

テ ク ス ト

1. HKA= Georg Trakl. Dichtungen und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe. Ergänzte Auflage. Hrsg. von Walther Killy und Hans Szklener. Bd. I,II. Salzburg. 1987.
2. IA= Georg Trakl. Sämtliche Werke und Briefwechsel. Historisch-kritische Ausgabe mit Faksimiles der handschriftlichen Texte Trakls. Hrsg. von Eberhard Sauermaun und Hermann Zwerschina. Stroemfeld. Bd.I. Bd.II. 1995. Bd.III. 1998. Bd.IV1. Bd.IV2. 2000.

用 語 索 引

Wetzel, Heinz : Konkordanz zu den Dichtungen Georg Trakls. Salzburg. 1971.

註

- 1) Susmann, Margarete : Das Wesen der modernen deutschen Lyrik. Stuttgart. 1910. S.16.
- 2) Peper, Jürgen : Transzendente Struktur und lyrisches Ich. In : DVjs 46(1972). S.408.
- 3) Esselborn, Hans : Georg Trakl. Die Krise der Erlebnislyrik. Köln/Wien. 1981. S.148.
- 4) Hamburger, Käte : Die Logik der Dichtung. 3.Aufl. Wien. 1980. S. 222. (ケーテ・ハンブルガー<植和田光晴訳> : 『文学の論理』. 京都. 1986.195 頁).
- 5) Weichselbaum, Hans : Georg Trakls Weg in die literarische Moderne. In : Georg Trakl und die literarische Moderne. Tübingen. 2009. S.223.
- 6) Weichselbaum, Hans : Inzest bei Georg Trakl. – ein biographischer Mythos. : In Androgynie und der Literatur um 1900. 2005. S.56.
- 7) Heym, Georg : Dichtungen und Schriften. Gesammelte Ausgabe. Band I. Lyrik. 1964. S.90.
- 8) Rimbaud, Arthur : Leben und Dichtung. übertragen von K.L.Ammer. eingeleitet von Stefan George. Leipzig. 1921. S.137f.
- 9) Wassermann, Jakob : Caspar Hauser oder die Trägheit des Herzens. München. 1984.

参 考 文 献

- 1) Cellbrot, Hartmut : Trakls dichterisches Feld. Freiburg im Breisgau. 2003.
- 2) Denneler, Iris : Konstruktion und Expression. Zur Strategie und Wirkung der Lyrik Georg Trakls. Salzburg. 1984.
- 3) Hiehl, Hans H. : Das Spektrum der modernen Poesie. Interpretationen deutschsprachiger Lyrik 1900-2000 im internationalen Kontext der Moderne . Teil I (1900 -1945). Würzburg. 2005.
- 4) Neri, Matteo : Das abendländische Lied. Georg Trakl. Würzburg. 1996.
- 5) Sorg, Bernhard : Das lyrische Ich. Untersuchungen zu deutschen Gedichten von Gryphius bis Benn. Tübingen. 1984.
- 6) Spinner, H. Kaspar : Zur Struktur des lyrischen Ich. Frankfurt am Main. 1975.
- 7) Zuberbühler, Johannes : Der Tränen nächtige Bilder. Georg Trakls Lyrik im literarischen und gesellschaftlichen Kontext seiner Zeit. Bonn. 1984.

2010 年度活動報告

1. 5月29日(土) 2010年度春季総会・研究発表会が東京都目黒区の緑が丘文化会館で開催される。

総会

- (1) 本会の2009年度の決算が承認された。

トラークル協会 2009 年度決算報告			
自 2009 年 4 月 1 日 至 2010 年 3 月 31 日			
収入の部		支出の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	109476	会場費 (南大塚文化創造館)	700
本年度会費	36000	切手代	5620
		封筒及び書留料	1040
		会場費 (ホテルいろは)	5000
		「トラークル研究」第六号印刷代	18000
		トラークル協会印	3990
		会場費 (目黒区緑が丘文化会館)	1300
		本年度支出合計	35650
		次年度へ繰越	109826
		(内、本年度剰余金	350)
合 計	145476	合 計	145476

- (2) 2010年度秋季総会・研究発表会

日時は、千葉大学で開催される日本独文学会に合わせて10月9日(土)、会場は、千葉大学が近い公共施設を予定。

- (3) 「トラークル研究」第七号は10月1日を目途に発行する。

研究発表会

三枝紘一：トラークルの詩における das lyrische Ich

高橋喜郎：トラークルの詩における多義性について

2. 7月30日(金) 2010年度第一回幹事会が開催される。

3. 10月9日(土) 2010年度秋季総会・研究発表会が千葉県船橋市中央公民館で開催される。

総会

1) 『トラークル研究』第七号について

10月1日発行予定であったが印刷所の変更のため大分遅れる予定

2) 2011年度春季例会について

6月4日(土)に日本独文学会が行われる中央大学に近い公共施設を予定

研究発表会

伊藤卓立：トラークルとリルケの黒について(1)ーリルケの黒について

三枝絃一：インスブルック版の編集方針について

4. 3月4日(金)2010年度第二回幹事会が開催される。

お知らせ

1. 2012年度春季研究発表会に発表希望の方は2月末日までに論題をお知らせください。
2. 「トラークル研究」第九号に論文等を発表希望の方は2月末日までにお知らせください。
3. 会費未納の方は御納入のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

発行がだいぶ遅れて申し訳ございませんでした。お詫び申し上げます。

後三年でトラークル没後100年という記念すべき年を迎えますが、この百年にトラークルの詩がどの程度理解、解明されたのでしょうか。今まで多くの研究がなされました。一般に多くの研究によって多くの成果が積み重ねられていき、その上に更なる展望が開かれるわけですが、トラークルの場合はなかなかそういうわけにはいかないところがあります。その大きな理由の一つにはその詩の質、すなわちリルケが述べているように魅力的ではあるが鏡像の世界のように容易に踏み込めない詩の世界にあります。また詩人のドキュメントも少ないし、さらには詩人自身、詩一般また自分の詩について皆無というほど語ってはいないことにも由来しています。従ってその詩を照らしだす二次資料を殆ど欠いていますので解釈がどうしても堂々巡りに陥りがちで生産性が期待出来ないところがあります。本会后三年で創設二十年という節目の時を迎えますが、そういう意味でときとして徒勞の思いが萌すこともないではありませんが、これからも「継続は力なり」を念頭において細々ながらも営々として続けていきたいと思えます。引き続いて会員の皆様のご協力を願い申し上げます。

三年後のトラークル没後100年並びにトラークル協会発足20周年の記念特集を企画したいと思っています。まだだいぶ先のことではありますが、どのような企画がよいか、アイデアをお寄せ下されれば幸いです。(さ)

トラークル協会会則

1995年 9月 20日制定

2003年 10月 18日改正

2004年 10月 1日改正

2005年 5月 3日改正

第一条（名称） 本会はトラークル協会と称する。

第二条（目的） 本会はトラークル文学の普及、及びその研究の促進を図ることを目的とする。

第三条（事業） 本会は年二回総会・研究発表会を開催する。また年一回研究誌を発行する。その他本会にかなう事業をする。

第四条（会員） 本会の会員はトラークル文学及びその時代に関心を有する者とする。

第五条（役員） 本会には会長（あるいは代表幹事）をおくことができる。

また若干名の幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）をおく。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）は総会において選出する。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）の任期は2年とし、再任を妨げない。

第六条（顧問） 本会には顧問をおくことができる。顧問の委嘱は総会で決定する。

第七条（会費） 本会の経費は会費、その他の収入をもって支弁し、会費は年額2000円とする。

第八条（決算） 本会は毎年度決算をし、総会に報告する。

第九条（改正） 本会則の改正は総会の出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

（備考） 本協会の事務局所在地を当分のあいだ、千葉県流山市大畔 237-3 三枝紘一方とする。